

き付ける諸争点は、どの程度までムスリムークリスチャン間の社会的亀裂を顕在化させる形で形成されるのか、またそれは華人性とどう関連づけられ、あるいはつけられないのか……著者の示唆した希望的シナリオは、こうした点にも大きく左右されるように思われる。そしてその帰趨は、本書が分析したような華人コミュニティとインドネシア政府との関係に加え、見市建が近著（『新興大國インドネシアの宗教市場と政治』）で分析したような、ムスリム・マジョリティ内の諸アクターの動向に大きな影響を受けるだろう。また、インドネシア華人の運命が遠く離れた中国大陸での政治情勢やインドネシア—中国間の外交関係によって何度も翻弄されたように、今日のジャカルタのムスリム多数派とキリスト教徒華人との関係性も、イスラーム教とキリスト教をめぐる世界各地での様々な政治情勢によって影響を受けざるを得ない。

こうした論点は、インドネシア華人の将来の安全や幸福にとっても、首都圏の将来的な繁栄にとっても、切実な論点と言える。本書が、今後日本でジャカルタの華人について知り、考える上で必ず参照される基本文献となるにふさわしい間口の広さ、簡潔さと文章の平明さ、専門性を兼ね備えているだけに、個人的には儒教以外の宗教と華人性との関わりについても、もう一章加えて深く論じて欲しかったという思いはある。しかし天に唾はしないもので、こうした「宿題」の指摘は、同じ首都圏を研究している評者にも即跳ね返ってきてしまう。紙幅の都合上これ以上挙げないが、評者にとって本書は今後インドネシアの華人についてさらに考え、論及していくための示唆に満ちており、様々な論点を想起させ、さらなる研究を誘いかける招きの本でもあった。これから本書を手取る他の多くの読者にとっても、そうであることを願いたい。

(新井健一郎・共愛学園前橋国際大学)

リチャード T. コーレット (著), 長田典之; 松林尚志; 沼田真也; 安田雅俊 (共訳). 『アジアの熱帯生態学』 東海大学出版会, 2013, xii+276p.

本書は、リチャード T. コーレット氏（中国科学院西双版纳热带植物园・教授）により2009年に Oxford University Press から上梓された *The Ecology of Tropical East Asia* の訳書である。本書は熱帯東アジア（耳慣れない単語であるが、定義は以下を参照のこと）の陸上生態学の全体像について広く説明しようとするものであるが、生態学のみならず、本地域の環境史、自然地理学、生物地理学から始まり、環境問題にも焦点を当てており、通して読むと本地域の自然環境について、その成り立ちから現在の問題までを一通り押さえることができる内容となっている。著者は生態学者である一方で、ATBC (Association for Tropical Biology and Conservation, 熱帯生物学・保全連合) の会長を務め、IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change, 気候変動に関する政府間パネル) の第5次 (2014年) 評価報告書第2作業部会において活躍しており、熱帯林における生態学の純粋な学問の面白さを追求するだけではなく、熱帯林をどのように保護し、再生していくのかといったことに対する強い関心が、本書の内容の隅々から感じ取れる。熱帯東アジア地域の研究をこれから行おうとする初学者、また、特定の地域やトピックについて既に深い知見を持っているが、広く本地域について知りたい方にもお奨めしたい本である。

本書は全10章からなる。1～3章はそれぞれ、環境史、自然地理学、生物地理学に焦点をあて、熱帯東アジアの自然についての概観を説明している。

1章の「環境史」では、本書で扱う「熱帯東アジア (Tropical East Asia)」についての定義が示されている。熱帯東アジアとは、アジアの熱帯・亜熱帯の東半分である、ミャンマー、ラオス、カンボジア、ベトナム、タイ、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、フィリピン、インドネシア西部、北緯30度までの中国南部、日本の琉球（南西）諸島、インドのアンダマン諸島およびニコバル諸島から

なる地域を示す。この地域は、生物地理学的にはひとつのまとまった生物地理区（3章「生物地理学」参照）として分類され、共通した特有の動植物相が見られる [Corlett 2007]。生物の分布や数を説明づける際には、「生態学的な」説明と「歴史的な」説明の両方が考えられる。生態学者は常として「生態学的な」要因に重きを置きがちであるが、著者はこの両方の側面から説明を加えており、プレートテクトニクスや熱帯東アジアの起源といった自然科学的な要因から、農耕、狩猟、近年の都市化のような人間活動による森林への影響といった要因まで幅広く扱い、これらが森林に与えてきた影響について議論している。

2章の「自然地理学」では、本地域の気象や気候、土壌といった環境要因と植生のパターンについて分かりやすく記述している。通常、植生のパターンといえば自然植生のみが取り上げられるが、本書では自然植生のみならず、プランテーションやアグロフォレストリーといった人間によって作りだされた植生についても扱っていることが特徴的である。また、フタバガキ科樹種が優占する非季節性の森林では、群集レベルで開花が同調する「一斉開花」現象が見られ、植物のフェノロジー（繰り返し起こる生物学的な現象のタイミング）は特に注目を浴びてきた分野である。最終節では、このフェノロジーに関して最新の研究結果が紹介されていて興味深い。

生物地理学は植物や動物の分類群ごとの地理的分布パターンを説明する学問である。ウォーレス [Wallace 1876] によって定められたウォーレス線という言葉に耳にされたことがある方も多いだろう。ウォーレス線とはボルネオ島とスラウェシ島間のマカッサル海峡、およびバリ島とロンボク島間のロンボク海峡をほぼ南北に通過する生物分布の境界線であり、これより西は東洋区、東はオーストラリア区に属する（脊椎動物の場合）。3章では、このような生物地理学的な観点から、地質学的な背景やその後の時間経過とともに現代の生物の分布がどのように成立してきたのかについて考察を行っている。これらの結果は、将来の気候変動に対して生物がどのように応答するのかを知るための鍵ともなる。熱帯東アジアには非常に

多くの島が見られるが、それぞれの島の生物相はこのような歴史的な背景を色濃く反映しているといえる。本章では、主な島々について、その成り立ちとそこに生育する動植物の特徴を詳細に記述している。これらの島の生物相は大陸の生物相とは異なる独特の生態系を形成しており、私にとっては心惹かれるものがあるが、小面積の海洋島が東西に数珠繋ぎとなっており、東に行くにしたがって乾燥の度合いや植物相が変化する小スンダ列島（ロンボク島、スンバワ島、コモド島、フローレンス島、アロル島、ウェタル島、スンバ島、ディモール島を含む）はぜひとも訪れてみたい場所のひとつである。

4章と5章では、これまでの章とは趣を変えて、熱帯東アジアにおける植物と動物の生態に関して最新の研究に触れながら紹介を行っている。

4章の「植物の生態」では、おもにこの地域で優占している被子植物の木本について扱っており、その中でも植物の生活史の初期段階である送粉・受粉と種子散布のシステムについて大きく取り上げている。送粉・受粉とは、花粉が葯から柱頭に運ばれることである。世界の被子植物の20%は風によって花粉が運ばれる風媒であるが、低地熱帯林においては、ハチ類やハナバチ類のような昆虫類、鳥やコウモリ、ツバイ、リスのような脊椎動物といった媒介者が、送粉・受粉に関して大きな役割を担っている。種子散布もまた、様々な生物の助けを借りて行われる。果実や種子を食料とする多様な生物が、知らず知らずの内に種子の運搬を行っている。運ばれた種子は、その後、発芽—実生—稚樹というステージを経て成木へと成長するが、成木まで辿り着ける種子はごく僅かである。この章では、これまで長年論争となってきた熱帯林の生物多様性の維持機構についてもいくつかのモデルを紹介している。5章の「動物の生態」は食性の違いによって分類されており、植食者、腐肉食者、肉食者、寄生者、雑食者、腐肉食者、糞食者のそれぞれについて、具体的な例を示して動物と自然環境とのかわりについての説明を行っている。

6章で扱う生態系生態学は、生態系におけるエネルギーや物質循環のしくみを理解するための学問である。近年、大気中への二酸化炭素などの温

室効果ガスの放出による地球温暖化が大きな問題として注目されており、森林が光合成によってどれだけの炭素を吸収し、また、呼吸によってどれだけの二酸化炭素を放出しているのかを広域で定量化することが必要とされている。これまでの研究で、東南アジアの大陸部の低地では、森林の総一次生産量は水分条件によって強く制限されていることが分かっている。しかし、従来の研究方法では、多数の調査地において反復して研究が行われていないこと、異なる場所では異なる測定項目や測定方法を採用していることが、地球環境問題解決のためのデータの統合化にとって大きな壁となっている。近年ではフラックスタワーを用いた森林の炭素循環の測定に加えて、人工衛星データを用いた予測モデルと気象データによって、広域スケールでの予測が可能となっている。植物の生育にはエネルギーと炭素以外にも様々な微量元素が影響を与えている。地球規模では、大規模な化学肥料の生産や農作物の栽培、化石燃料の消費等といった人間活動により、環境中に大量の窒素が蓄積されてきており、その量は将来的にもさらに増大すると予測されている [環境省 2007: 13]。これによる人工的な窒素の不均衡が生態系の物質循環、および人間社会に与える影響はまだまだ未知のものであり、今後も様々な問題に発展していくことが予想される。

このような現状を踏まえつつ、7章と8章では、それぞれ、「生物多様性への脅威」「保全——すべてのピースを守るために」と題して、現代における熱帯林問題を取り上げ、これを解決するための議論に発展させている。

7章の「生物多様性への脅威」では、人間が生物多様性に与える影響について説明している。5千年前の熱帯東アジアの総人口は数百万人に過ぎず、ほぼ全域が森林に覆われていたが、現在では10億人が居住しており、森林の半分以上が消失し、残り半分は劣化、または伐採されている。これは生物多様性減少の原因となるものであるが、その背後には、貧困、汚職、グローバル化といった問題が横たわっている。その中でも我々日本人と特に関係性が深いのはグローバル化であろう。本地域で森林減少の要因となっている木材の伐採や油

ヤシ、ゴム農園の増加は、そのほとんどが海外からの需要に答えるためである。言い換えれば、これらの産物は熱帯東アジア諸国の経済発展に多大な貢献をもたらしているといえよう。このことから、ひとくちに生物多様性の保護といってもその道のりはそうとう険しいものであろう事が予想される。先進国市場では、より環境に配慮した製品の需要が高まってきているが、これは現在の生物多様性の減少に対して、それほど大きな効力を持っているとはいえない。近年では、森林の減少・劣化による気候変動への影響が注目されてきているため、次章で取り上げるような様々な取り組みがなされてきている。私個人の意見としては、この章で、生物多様性はなぜ重要なのか、という問いに触れていないことに物足りなさを感じた。この本を手取る人にとって、生物多様性の重要性は周知の事実であるのかもしれない。しかし、続く8章は、生物多様性を守るためにはどのような方法があるだろうか? という問いかけで始まっているので、なおのことこの議論はなおざりにはできないだろう。というのも、森林や自然に関わる職種以外の人々にとっては、生物多様性の重要性はまだまだ認識されていないように感じられるからである。都市での日常生活の中では、森林の減少・劣化や生物多様性の減少から影響を受けることはほとんどなく、森林や生物多様性の保護や保全についても、単に自然好きの人々が何か言っている、というように捉えられかねないのが現状である。しかし、気候変動の問題からも分かるように、現在の自然を保持していくことは、現在の地球環境の維持につながると考えられる。同様に、生物多様性の保全は、たとえ表面上は直接関係ないように見えたとしても、地球上のすべての人々にとって様々な重要性を持っているといえるのではないか。

さて、そこで8章であるが、この章の冒頭では、熱帯東アジアに残存する生物多様性の高い場所の多くが辺境に集中していることを指摘し、生物多様性の保全のためには、そのような場所で生活する地域的、社会的、経済的弱者に直接的、および受動的な負担を課すことになっているとしている。ここでの受動的な負担とは、土地利用の制限、人間、

家畜、および農作物の被害などである。しかも、これらの問題は非常にローカルな問題であるのに対し、保全によって利益を受ける人々は都会や先進国の人々である。このため、保全を行う側と、それによって利益を受ける側とのあいだに齟齬が生じる。この対応策として、環境サービスに対する直接支払い制度 (payments for environmental services: PES) やカーボンオフセット、生物多様性オフセットといった環境保全活動に対して現地に対価を支払う仕組みやエコツーリズム、様々な認証制度、また、NGOによる環境保全の取り組みが行われている。これに加えて、保護区の設定と地域社会参加型の保全活動や持続的森林利用に関する取り組みも行われている。しかしながら、著者によると、これらの活動が実際に生物多様性の保全にどれほど寄与しているのかを示す研究例はない。このため、今後、保全活動の結果を客観的に評価するシステムが早急に必要になってくると指摘している。

現在、東南アジアの熱帯泥炭湿地の劣化が問題となっている。熱帯泥炭湿地には泥炭土壌中に膨大な量の炭素が蓄積されているが、近年、開発による環境破壊によって大量の二酸化炭素が泥炭土壌から大気中へ放出されるようになった。これは、地球温暖化の原因となる大きな環境問題として世界的に注目を集めている。特に、インドネシアで近年激しさを増す泥炭火災は、地球温暖化のみならず、国境を越えた煙害となって近隣諸国との軋轢をも生み出している。インドネシアは、この泥炭火災が原因で世界第3位の二酸化炭素排出国となっている。熱帯泥炭湿地林は全世界の森林面積のおよそ6%を占めている。これは決して高い値ではないが、本書の中でも随所に泥炭湿地林に関する記述が見られることから、その重要性は明白であり、この本の執筆時点(2009年)においても泥炭湿地林における違法伐採や泥炭火災が世界的な問題として取り上げられていたことがうかがい知れる。そして、2015年現在、この問題はいまだ解決されておらず、むしろ、環境破壊は悪化の一途をたどっているといえるだろう。そのような状況の中で、我々には何ができるのであろうか。著者であるリチャード T. コーレット氏は、この本の

最後に、読者である生態学者に生物多様性の保全に向けて研究を続けることに加えて、環境保全に対して行動を起こすように訴えている。それほどに現在の状況は危機的であり、将来的にどれだけの自然を残すことができるのかは、現在の科学者の行動にかかっているといえるのかもしれない。しかしながら、同時に、泥炭地問題であれ、その他の環境問題であれ、部分的・局所的な研究結果や誤った知識をもとに効果のない(もしくは逆効果となる)環境政策を押し進めるようなことになってはならない。そのためにも、継続的で信頼のおける研究データの蓄積が、今後、ますます重要になってくるといえるだろう。

(塩寺さとみ・京都大学東南アジア研究所)

#### 参考文献

- Corlett, Richard T. 2007. What's So Special about Asian Tropical Forest? *Current Science* 93(11): 1551–1557.
- 環境省. 2007. 『平成19年度版 環境循環型社会白書』
- Wallace, Alfred Russel. 1876. *The Geographical Distribution of Animals*. London: Macmillan.
- ||| Marcus Mietzner. *Money, Power, and Ideology: Political Parties in Post-Authoritarian Indonesia*. ||| Singapore: NUS Press, 2013, 320p.

#### I 本書の位置付け

本書は、ポスト・スハルト時代のインドネシア政治研究に大きな理論的影響を与え、メディアなどにおいても批判的に政党政治を形容する際に広く用いられるようになった「カルテル政治」の概念に対して、大胆かつ緻密な議論を挑んだ秀作である。今日のインドネシアの政党を比較政治の議論の俎上に載せて再考し、その地域的あるいはグローバルな傾向との共通点及び特異性を明らかにすることを目的としている。本書は主に二つの先行研究の潮流に対して異議を唱えている。第1に、これまで多くの政党政治研究が指摘してきた、インドネシアの政党の制度化レベルが低いことを